

語ろう！科学への期待

実施報告

（サイエンスアゴラ 2016 出展）



Center for Science Communication
科学コミュニケーションセンター



国立研究開発法人
科学技術振興機構
Japan Science and Technology Agency

全体概要

時代とともに変化する人々の価値観に呼応して、科学に求められる期待も変化している。例えば人々が科学に向き合う時、「心の豊かさ」と「物の豊かさ」でどちらを優先するかによっても、科学に求める期待は異なるだろう。このような関心のもと、科学コミュニケーションセンターは研究開発戦略センターと共同して、サイエンスアゴラの来場者の声を取り上げつつ、価値観や求めるものの違いという社会の多様性について、とくに若者と共に考え、これからの科学への期待を読み解く試みを行い、今後の活動の検討材料とすることとした※。具体的には、ブース展示にて、50年後に暮らす子孫たちに贈りたい地球の姿についてのアンケート「教えて！科学への期待」を実施した。また、学際的教育プログラムを受講する大学院生 11 名と、人文社会学者、研究開発戦略立案の関係者らが、残したい未来社会とそれに向けて求める科学技術に対話によって見出そうとするワークショップ「語ろう！科学への期待」を実施した。

※各センターの役割

- ・ 科学コミュニケーションセンター（CSC）
多様なステークホルダーによる対話・協働を促進し、科学と社会の関係を深化させることで、新たな価値の創造に貢献する活動を行う
- ・ 研究開発戦略センター（CRDS）
国の科学技術イノベーション政策に関する調査、分析、提案を行う

「教えて！科学への期待」

出展番号：Aa-024

日 時：2016 年 11 月 3 日（木・祝）～6 日（日）

場 所：会場（日本科学未来館）1 階

企 画：JST 研究開発戦略センター／

科学コミュニケーションセンター

協 力：日本科学未来館



「語ろう！科学への期待」

出展番号：Ab-113

日 時：2016 年 11 月 6 日（日）10:15～12:00

場 所：A 会場（日本科学未来館）1 階

企 画：JST 科学コミュニケーションセンター／

研究開発戦略センター



「語ろう！科学への期待」議論のまとめ

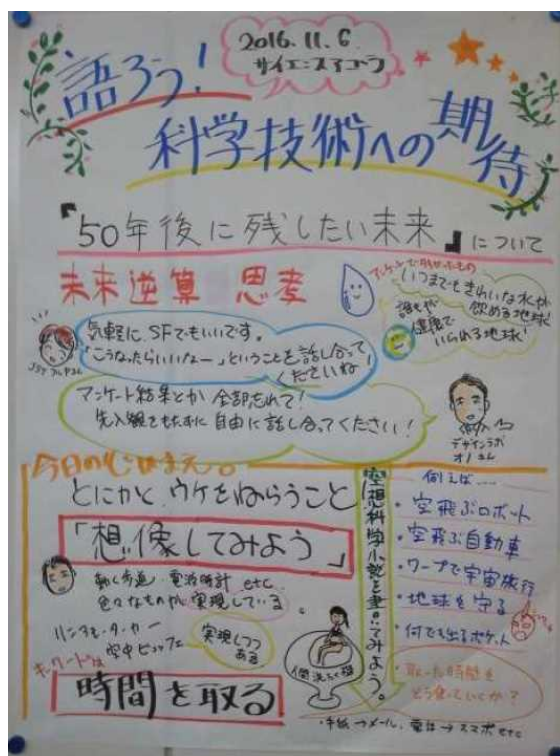
■ プログラム

- 10:15～10:20 趣旨説明
- 10:20～10:30 話題提供
- 10:30～11:35 ワークショップ
- 11:35～12:00 ラップアップ



話題提供「想像してみよう 科学の未来」

京都工芸繊維大学 副学長/KYOTO Design Lab ラボ長 小野芳朗



開催趣旨

■ 参加者

テーブル 1

ファシリテーター	内田 嵩（京都工芸繊維大学，M2）
メンバー	澤井 伽奈（大阪大学超域イノベーション博士課程プログラム，D1）
〃	陈 赟（九州大学芸術工学府，M2）
〃	倉持 隆雄（JST 研究開発戦略センター センター長代理）
メンター	小野 芳朗（京都工芸繊維大学 副学長/KYOTO Design Lab ラボ長）

テーブル 2

ファシリテーター	近藤 弘規（京都工芸繊維大学，M1）
メンバー	陣内 隆亘（九州大学芸術工学府，M1）
〃	加藤 麗子（ギジログガールズ）
〃	嶋田 一義（JST 科学コミュニケーションセンター 調査役）
〃	柴田 孝博（JST 科学コミュニケーションセンター 事務局長）
メンター	岡田 栄造（京都工芸繊維大学デザイン・建築学系 教授）

テーブル 3

ファシリテーター	高松 夏美（京都工芸繊維大，M2）
メンバー	大門 大朗（大阪大学超域イノベーション博士課程プログラム，D1）
〃	向久保 沙耶（九州大学芸術工学府，M1）
〃	庄司 真理子（JST 研究開発戦略センター 副調査役）
メンター	山崎 吾郎（大阪大学 CO デザインセンター 特任准教授）

テーブル 4

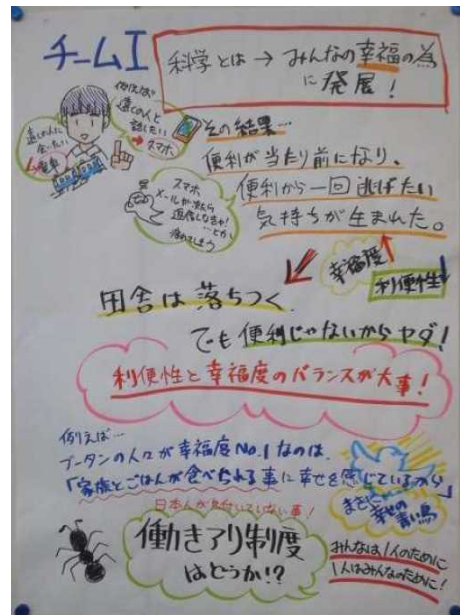
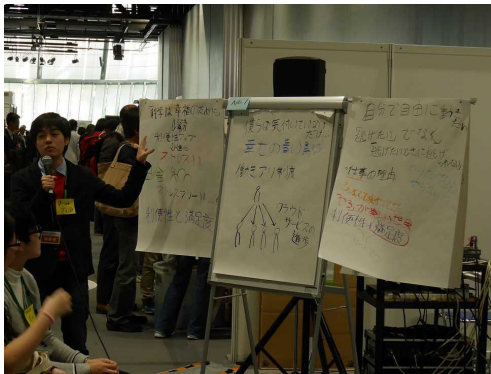
ファシリテーター	中部 主貴（京都工芸繊維大学，M2）
メンバー	常盤 成紀（大阪大学超域イノベーション博士課程プログラム，D1）
〃	水野 諒大（九州大学芸術工学府，M1）
〃	高良 玉代（ギジログガールズ）
〃	中村 幹（JST 研究開発戦略センター 調査役）
メンター	平井 康之（九州大学大学院芸術工学研究院 教授）

議事可視化	加藤 麗子、高良 玉代（ギジログガールズ）
-------	-----------------------

■ ワークショップ結果

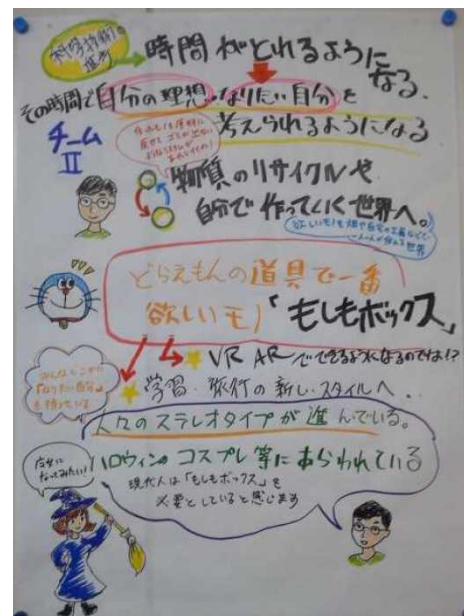
グループ1.

科学は人々の幸福のために発展したが、科学の発展で失われる価値もある。人は田舎が落ち着くと感じるし、科学技術の成果としての便利さがストレスになることもある。それらから逃れたい一方、完全に離れてしまつては困る。そこで「一旦」離れられる「幸せ」を実現できるしくみができるとうい。ブータンのような幸福の形もある。利便性と満足度のバランスが大事。



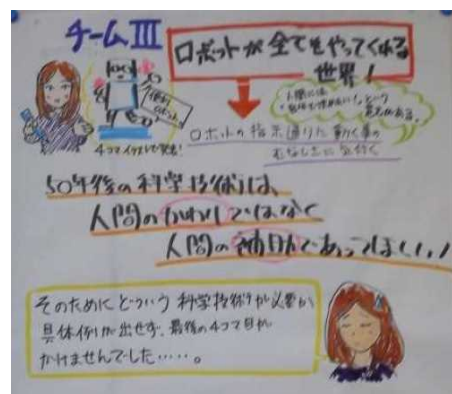
グループ2.

「あるといいね」という科学技術は多様に思いつく。しかし、人間としてそれでいいのかという疑問も生じ、悩ましい。自分の理想やなりたいたい自分を考えられるような世界であってほしい。



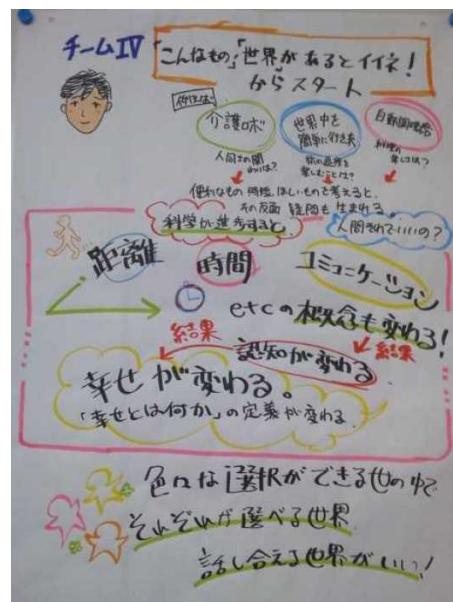
グループ 3.

子どもがそうであるように、人は自分で決めたいという意思がある。しかしこのままいくと、人間が何も決めなくてもよい、決められてしまう世の中になってしまうのではないか。あくまで人間主体で、その補助としての科学技術であってほしい。しかし、それが具体的にどのようなものかは難しい(4コマ漫画で表現しようと試みたが4コマ目が書けなかった)。



グループ 4.

50 年後は、距離、時間、コミュニケーションの概念が変わり、幸せの形も変わるかもしれない。いろいろな選択ができる世の中で、それぞれが選べる世界、話し合える世界であってほしい。



メンター総括.

- ✓ 共通するキーワードは「幸せ」の追求。高度経済成長期に青年期だった世代と、現在の若者との世代間ギャップが顕著に顕れた。
- ✓ 改めて、科学技術は人が人らしく生きるためにあることを再確認できた。



岡田 栄造
京都工芸繊維大学デザイン・建築学系 教授



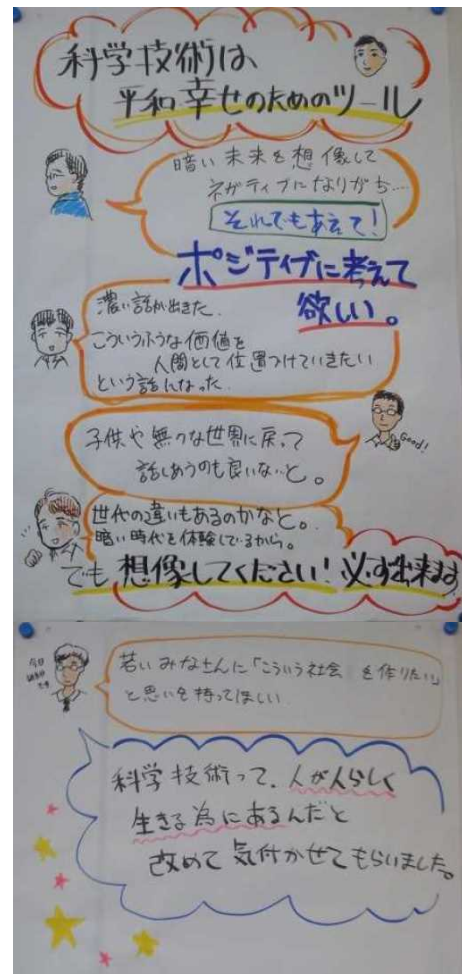
平井 康之
九州大学大学院芸術工学研究院 教授



山崎 吾郎
大阪大学 CO デザインセンター 特任准教授



小野 芳朗
京都工芸繊維大学 副学長
KYOTO Design Lab ラボ長 小野芳朗



倉持 隆雄
JST 研究開発戦略センター センター長代理

まとめと考察

- 「50 年後に暮らす子孫たちに送りたい社会」について、学際的プログラムに所属する大学院生 11 名が 4 グループに分かれて議論した。
- この結果、「送りたい未来社会」に共通するキーワードは、「幸せの追求」だった。
- しかし、それを実現するための科学技術のあり方については、いずれのグループも明確な答えを出せなかった。このことは、たとえば’70 時代に、万博で展示された様々な新製品に顕れたように、社会の技術的欲求が明らかだったこと比較して、世代間のギャップが大きいとメンターから指摘された。「科学技術への求め」と視点を絞ったとき、世代感の価値観・ムードの違いが顕著に顕れたと言える。
- 科学技術と切っても切り離せず、生活の隅々までその恩恵を受ける現代から、次の時代はどのような方向に向かうのか、参加者誰もが容易に答えを出せなかった事実重要。
- 次の時代に向けて追求したい幸せとはどのようなものか、若者の価値観の背景への理解を深め、世代を越えて目標を見出す過程が必要である。

※以上のまとめは、JST によるもので、逐語録ではありません。また、各グループワークの結果をまとめたグラフィックは、当日の記録をもとに、後日清書されたものです。

以上